

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】(2ユニット/Aユニット)

事業所番号	2770103782		
法人名	社会福法人 関西福祉会		
事業所名	陵東館秀光苑		
所在地	堺市北区長曾根町1199-6		
自己評価作成日	令和5年11月3日	評価結果市町村受理日	令和6年1月19日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://kansai-fukushikai.or.jp">https://kansai-fukushikai.or.jp</a>
----------	---

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ ナルク福祉調査センター		
所在地	大阪市中央区常盤町2-1-8 FGビル大阪 4階		
訪問調査日	令和5年12月15日		

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

どうすれば混乱や不安無く、その人らしく生き生きと暮らして行けるのかをご本人や家族と相談しながら職員間でアイデアを出し合い個別に対応しています。  
 長年の習慣が自分で続けられるよう家族に聞き取り、本人と相談しながら生活の場面に取り入れ自分で出来る喜びを感じていただける様にどうすれば出来るのかを職員で工夫しています。  
 利用者は同年代で同じ地域に長年暮らしており、おしゃべりに花が咲き居間で過ごされている時間が多いです。利用者同士が良い関係を続け穏やかに過ごせるように支援を続けています。

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

高齢者総合福祉施設・障害者(児)・保育サービスを事業展開している社会福祉法人関西福祉会を事業母体とする当事業所は、平成14年4月に開設された。法人がテーマとしている地域に根差し開かれた施設として、幅広い福祉関連施設の運営展開で長年培われた貢献は、地域での認知度や信頼は厚い。利用者が自由に穏やかに自分らしく豊かに暮らせる支援を目指し、長期勤続者が多く在職している環境下で、利用者・家族・事業所の三位一体での共存が定着している。又利用者個々の有する能力や趣味を引き出し、生活に潤いと充実感が感じ取れるよう支援している。コロナ渦中の4年間は地域行事の参加や地域のひととの交流は自粛していたが、今後は施設合同の納涼祭・文化祭を再開し、地域行事に積極的に参加したいとしている。

### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	【本評価結果は、2ユニット総合の外部評価結果である】			

自己評価および外部評価結果【2ユニット総合外部評価結果】

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	その人らしい生活、自分でできる喜びを感じる暮らしをおくるという理念のもと、地域の認知症の方々を長年、受け入れ地域の生活の延長のようにできる事を続けていけるように、地域の方、家族の協力を得ながら管理者、職員は日々実践している。	職員の意見をまとめた「地域の中で支え合い共に歩む 自由でやすらぎある自分らしい暮らし」の内容の理念を3・6階のリビングに掲げ、意識の徹底を図っている。朝・夕の申し送り時や職員会議で具体的なケアの実践について話し合っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナウイルス感染症のため、この数年間地域のイベント自体が中止となり付き合いは減ってしまったが利用者家族、親戚、友人は地域に多く住んでおり細々ながら地域との付き合いは続いている。今後、地元の活動、交流に積極的に参加していく。	運営推進会議で地域包括支援センターや民生委員から地域の情報を得ている。利用者・家族は地域の出身及び在住者が多く、近所付き合いや交流が根付いている。地域の認知症カフェ・古民家カフェに出かけたり、事業所建物1階にある地域包括支援センターでのラジオ体操に参加するなど幅広い交流の場がある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	当事業は認知症の施設として、20年以上運営しており地域の認知症の方々を受け入れケアを続けていることが地域に浸透し認知症ケアの拠点となっている。これまでの経験と実績を活かして、さらに地域へ発信して行く。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナウイルス感染症で書面開催となっていた会議も今年度より以前のように、施設内で会議を開催している。毎回、ユニットごとに利用者の様子や取り組みを報告し感染対策や防災対策なども助言を頂いたり意見を交換している。	地域包括支援センター・地域福祉委員・住民代表・認知症知見者・家族の参加の下、新型コロナ5類移行以降は対面会議(4回)となっている。移行以前の2回は書類報告を行っており、事業所の状況・活動内容(行事・イベント・クラブ活動)報告や感染対策を伝え、参加者から意見・要望・助言を貰いケアサービスに活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村関係者とは事業所の運営などについて疑問や相談したい事があれば、すぐに報告や相談を行うようにし現場の実情を伝えている。施設のある建物の1階に北区の第2地域包括支援センターがあり、すぐに相談できる環境にある。	市の介護事業課と主に電話で連絡し、研修案内や情報・アドバイス・指導を受け、事業所の取り組み状況を伝えている。北区のグループホーム連絡会にはリモートで参加し、地域の同業者間で情報交換を行っている。事業所建物の1階の地域包括支援センターと頻りに連携を取り合っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人内に身体拘束委員会を設置しており毎月会議をし、グループホーム職員も参加し会議の内容は回覧し周知している。スピーチロックやどういったことが身体拘束にあたるのか事例をあげ勉強会を行っている。コロナ感染対策以外は、基本は利用者は館内を自由に行き来している。	研修と身体拘束適正化委員会を通して、身体拘束の内容理解の深化に努め、職員の共有意識を図っている。スピーチロックにはどのような言葉が拘束に該当するかを確認し、言葉掛けに留意している。夜間のみ離床センサーの使用者(3人)には家族に説明し同意を得ている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内に高齢者虐待防止委員会が設置され、会議に参加している。虐待は介助者が疲労困憊し追い詰められた状況で起こる。職員同士でストレスをためない職場作りをしている。利用者が暴力をふるう場合はその原因についてチームでよく考え、落ち着くように家族の協力も得ながら工夫している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内での研修で学ぶ機会を持ち、ケアの関わりの中で常に意識するようにしている。また後見人制度を活用している利用者もおられるので、実際に制度に関わり支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約締結の際には契約内容について丁寧に説明の上、利用者・家族ら個々の意見や要望についても契約に沿った形で支援できるように応えるようにしている。内容が改訂される際には書面等で随時通知をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族が意見や思いを伝えられるよう、面会時や家族会、ケアプラン説明時等で常に問い掛けている。又、地域推進運営会議に参加された家族より、その都度意見を頂いている。 意見箱を設置し、直接は言いづらい事なども意見できるよう配慮している。	自身の意見を表す事が難しい利用者には日々の生活の中で目配り・気配りに徹して把握に努め、家族には訪問時に気軽に話してもらえよう、問い掛けを行い傾聴している。コロナ渦中では面会の要望が多かったが、現在は自由な面会となっている。近隣の公園での家族会はボランティアの協力も得て、歌のミニコンサートを開いて好評を得ている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	法人の運営に関わる事項等は適宜職員らへ伝達し、それらをいかに利用者の支援へと繋げられるかを、事業所内の会議や日常業務の中で職員からの意見を反映し実践するようにしている。	おでかけ・カルチャー・レクリエーション・うまいもんクラブを設けて、職員が各々関わり運営面に携わっている。管理者・職員間のコミュニケーションは良好で、日常のケアでの気づきや提案を直接聞いている。職員から出された事案は随時話し合い検討している。食事摂取が困難になってきた人に、補助用具の使用や調理方法の見直し案に答えている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	現場の勤務状況や業務内容および利用者へのケアが、利用者および家族へとしっかり反映できている成果等を管理者から代表者へ適宜伝達し、職員の意欲向上に努めている。また休暇等の取得も個々の希望に応じれるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の研修は全員が参加および書面参加ができるような取り組みがあり、技術・知識向上に努めている。認知症研修など法人外での研修にも参加できる機会が持てるよう職員の意見を適宜確認している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	堺市北区グループホームの連絡会は引き続きリモート会議を継続し、管理者間の交流、意見交換の場を設け、お互いでの施設の取り組みや運営に関わる内容等を情報共有している。今後コロナ5類への変更を受け、さらに施設間の訪問を再開できるよう話し合っている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に面談し本人や家族、周囲の人に十分に話を聴き、これまでの人生歴、得意な事、好きな事など本人自身に関心を持つことが大切だと考えている。十分なコミュニケーションが取れない方でも訂正説得はせず可能な限り一旦、受け止めを行い丁寧な対応を心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が抱える、心身の負担について心を配り、家族の心情や負担感を理解し話を聴き要望や希望を受け止めるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	今、必要なことは何かということを職員間で随時、話し合っている。緊急性を見極め、法人全体で支援を行えるようにもしている。初期段階では24時間の生活チェック表を付けて本人の生活リズムや必要な事の把握に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常生活を共にしていると利用者のお話から暮らしへのこだわり、物の見方などにはっとさせられ学ぶことが常々ある。一人一人の考え方を尊重し、力を発揮して頂けるよう働きかけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の近況や変化があった際は電話や面会時に伝え、家族の考えを聞かせて貰っている。また病院受診の付き添いをお願いしたり、本人の身の回りの事を一緒に考えたりしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	希望される方に携帯電話を持ち込んで貰っており自由に家族や友人に掛けてもらっている。以前住んでいた近所の方が遊びにちょくちょく来られたり、同法人のデイサービスを利用の友人におしゃべりに行ってもらったりしている。	友人(以前の住居の人)知人(ピアノ講師時代の生徒)などの訪問は、家族の了解を得ている。頻度の差はあるが利用者全員の家族の訪問がある。馴染みの美容院や墓参り・外食などは家族同行で出かけ、これまでの生活習慣を大切にしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の相性を把握し、テーブルの配置や座席の位置を考え利用者同士がゆっくりと話せるように配慮しており、話が弾んでいる。職員に話せない悩みや愚痴などお互いに話したりまた諭したりしている様子が見られる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用者の身体の状況で同じ法人の特養に移られる方が多く、今までの暮らし方や習慣、家族のことなど情報を詳しく伝えている。また特養の職員と情報の共有や相談に乗っている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	それぞれの状態に合わせた支援ができるよう、日常的なかかわりの中で、どう思い、どう暮らしていきたいのか意向を確認しながら接している。生活の中で垣間見る表情や言動などから本人の気持ちの理解に努め、本人本位の生活になるように支援している。	理念にある自由で自分らしい生活の具現化に一人ひとりの思い・暮らし方の希望・意向の把握に努め、本人の視点や意思決定を尊重している。利用者の約半数(8~9人)は意思表示ができるが、難しい人には、表情や動作で状態や変化を察知している。掴んだ情報は申し送りノートやケース記録に記入し共有を図っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前に家族にフェイスシートを記入してもらい、以前、利用のあった事業所があれば可能な範囲で聞き取りをし情報収集に努めている。 本人との日常の会話の中で今までの生活のことや暮らしのことを聞いている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人の様子など、ケース記録や申し送りのノートに記録し職員間で共有している。 本人のまだ出来ることを把握し自分で行ってもらうよう声掛けしている。出来なくなりつつあることも、色々な工夫で出来ないか普段から話し合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族からは随時、介護に関する意向を聴き反映させている。それと共に常に本人のそばにいて見守っている職員の意見も大切に、様々なアイデアを出し合いながらより良いケアにつながるようモニタリング、カンファレンスで検討し介護計画の作成を行っている。	毎月のカンファレンス・3ヶ月毎のモニタリングで心身の状態や生活上の課題を検討し、訪問診療記録・ケア記録・業務日誌・申し送りノートを参考に関係者全員の意見を反映した計画作成を行っている。計画作成前の担当者会議は管理者・ケアマネージャー・職員が参加し、利用者・家族には事前に意見を聞き、現状に沿った計画作成となっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録に介護計画の内容を反映したチェックリストをつくり見直せるようにしている。日々の生活の様子や本人の発した言葉などもそのままに記録し情報を共有している。日々の記録をもとに介護計画の見直しをしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ感染症が5類に変わり、家族の希望から面会については自由に居室内で行ってもらったり、外食にも行って頂いている。ガイドヘルパーを利用し外出して障害のある子供と散歩し食事をして来られる方もある。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	週に一度、地域包括支援センター主催のラジオ体操に参加し地域の方と一緒に体操したり、同法人運営の認知症カフェにお茶を飲みに行ったり、古民家カフェで地域の子供たちとの交流などもしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	施設管理医師、看護師と連携を図り必要に応じた医療機関へ受診している。皮膚科、整形外科、歯科への受診も家族と相談し希望の医療機関へ受診出来るようにし、家族の付き添いで以前からのかかりつけ医を受診されている方もいる。	協力医療機関の内科医師の訪問診療は月2回あり全員受診している。歯科は3割の希望者が月2回診察を受けている。定期検診は行っていない。循環器科・精神科等の受診は家族付き添いで通院している。診察結果は家族から報告を受け、必要時利用者の状況で管理者が付き添い受診もある。協力医療機関の看護師・医師と24時間連携が構築されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	それぞれの利用者が適切な受診や看護、処置が受けられるように、日々の関わりの中で変化や気づきをすぐに看護師に伝えて相談し協力を得て必要な医療が受けられるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時には、生活面を主としたサマリーを入院機関に提出し、本人の状態を伝え、面会に向いた際にはサマリーでは伝えきれなかった事業所での様子を伝えている。病院関係者からは入院時の様子、今後の生活についても相談し情報交換と相談に努め、入院をきっかけとした認知症の進行を防ぐため早期退院できるようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	身体の状況やADLの低下などは、変化のみられた早い段階からその都度家族にお伝えしている。法人の母体は特養であり、入居の際には基本的には看取りは行わず、特養への移行を勧める旨を伝えている。	入居契約時に重度化指針を説明し同意書に署名を交わし、状況により可能性として特養への移行を含めた説明を行っている。職員は重度化や看取りケアの経験者も多く本年7月事業所で1名の看取りケアを行っている。終末期ケア・看取りケアの勉強会も定期的に行い、振り返り学習も行われている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急連絡網や緊急時対応をフローチャートにしたマニュアルなどを目の届くところに配置し、勉強会などで、職員は救命処置についてや緊急時対応の講習をうけている。緊急の搬送に備え利用者毎に連絡先や既往歴、服薬情報を記録した緊急シートを作成している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	2か月に1度他部署との連携のもと避難訓練を行い、地震を想定した訓練も取り入れ、様々な場面での避難の対応を行えるよう取り組んでいる。しかしBCP策定においては簡易的なマニュアル作成に留まっており、大災害時に備えた訓練とまでは取り組めていないのが現状。今後の課題である。	消防避難訓練は、年2回(3月は車椅子利用者も含め全員で行い、10月は消火・通報・避難)を自主訓練で実施し、堺市北消防署に報告している。関連部署の訓練時は、伝達・連絡の協力を行っている。備蓄品は法人が管理している。緊急連絡網はスタッフのグループラインとチャートで明確にし有事の見守り体制は近隣職員数名が担っている。	業務継続計画(BCP)は、速やかな策定を望む。備蓄は法人管理となっているが、事業所独自で利用者・職員を含む5日以上以上の備蓄を準備し「備蓄チェックリスト」の作成を早急に行い消費期限等の管理を定期的実施し担当者を決めて行う事を期待する。



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねることが無いよう、言葉遣いや声のトーンにも注意している。 個人情報保護法についての研修に参加し、どういったことが個人情報に当たるのかなど施設で勉強会を行なった。	リビングルームから離れた場所に居室があり個別対応している。排泄・入浴・更衣など羞恥心・プライバシー保護に十分に留意して支援している。言葉かけがスピーチロックにならない様「ちょっと待って」言葉を置き換えて伝える工夫をスタッフは理解しているが、更に定期的に法人研修を行っている。個人情報の書類等は鍵付き書庫で管理している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人にどう働きかけたり、接すれば自分の思いや希望が表しやすいのか、自分で決められるのかを考え対応している。自己決定ができない方に関してはこれまでの生活して来た場面から、どう判断されるかをこちらで考え決めてしまっているところがあるかも知れない。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴、食事、消灯の時間など一応設けているが本人の希望や体調、ペースに配慮しながら柔軟に対応している。また、生活において常に本人の意思を確認し、希望に添えるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時や入浴時、また外出時などその都度、意識して本人と服を選んだり身だしなみを整えたりしている。服装や持ち物の何にこだわりがあるのか、長年の習慣なども日常生活のなかで、聞き取り、個人個人のスタイルにしていだいでいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	季節やイベントに応じて趣向を変え、一緒におやつ作りをしたり喫茶に行くなど楽しんでもらえるように努めている。夕食は食材と献立が搬入されているが利用者の希望を反映し献立をアレンジしている。テーブルを拭いたりお茶を入れたり食材を取りに行ってもらったり何か役割を持つように働きかけている。	朝・昼は施設の調理場から調理された食事が配膳される。夕食は食材が運ばれ日勤職員が作っている。弁当希望時はパンフレットから注文し、「お寿司が食べたいね」の時は回転寿司を職員が買いに行っている。テイクアウトも時々あり餃子など季節行事・敬老会、誕生会など多彩である。おやつレクリエーションもお好み焼き・たこ焼きをホットプレートで作り利用者は食材を刻んだり食器洗いを職員と一緒にしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	摂取量は記録に残して、職員全員が把握できるようにしている。一人一人の状態に合わせて食材の形状や調理法や量を工夫している。食器や箸、湯呑み、マグカップなど自宅から使い慣れた物を持って来てもらっている。また軽い物に変更したり盛り付けを工夫して自分で食べられる支援を考えている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人一人の口腔状態や本人の力に応じて必要な物品を準備し、本人が取り組めるように声を掛けたり、手伝ったり必要なケアを行っている。 口腔ケアマネジメント計画書を立て歯科医師と歯科衛生士より助言やチェックをもらっている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用し一人一人の排泄パターンを把握しトイレへ誘導している。肌のトラブルがある方には布パットを使用したり、下着にこだわりがある方には布パンツと紙パンツの併用など、個々に合わせ工夫している。夜間は睡眠時間を考えながら声掛けしているが失禁による洗濯物が増えている。	排泄チェック表を参考に個別対応し、日中はトイレで便座使用を基本にしている。利用者の3分の1は布パンツであり、リハビリパンツにパットの併用が殆どである。夜間のみ紙パンツで日中はリハビリパンツとパットで支援している。夜間巡回は1時間毎であるが、睡眠を重視して個別に対応している。来年度は18台「眠りスキャン」の導入を予定している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘がちな方には、好みそうな飲み物や乳酸菌飲料を家族と相談しながら持ってきてもらい水分を多く飲んでもらったり排泄パターンを掴んでトイレに誘導し長めに座ってもらったりしている。排便状況を看護師に伝え相談し内服薬のコントロールをしたり朝のラジオ体操を行ない、水分補給してもらうなど内外から働きかけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	ユニットには入浴を楽しみにしている方が多く、入るタイミングなどはその都度その方に合わせている。好みのボディスポンジや髭剃りの道具や入浴後のクリームを準備している。毎月26日は風呂の日で季節の湯を用意し入浴を、ゆっくり楽しめるようにしている。	午前中を基本に週2～3回を入浴日として、時間帯は希望を聴いている。嫌がる利用者はいるが声掛けの工夫やタイミングで、お風呂と言わず散歩後の着替えで脱衣室に誘い入浴している。26日を風呂の日として27・28日の3日間は好みの入浴剤を使い冬至にはゆず湯で季節感と香りを楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室温や騒音に配慮して良眠できる環境作りに努めている。ポアシーツを敷いたりクッションや毛布、枕など好みの寝具を持ち込んでもらっている。夜間、眠れず徘徊してしまうとまたせん妄が起きてしまうなどトラブルがある際、別に記録シートを使い昼間の過ごし方や夜の状況を記入し安眠出来る方法を皆で考えている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々のケースファイルに服用している薬の情報を添付しており、いつでも確認出来るようにしている。また誤薬を防ぐため名前のついたファイルに指示薬を入れ服用前にもう一度名前の確認ができるようにしている。本人の状態に合わせて薬の形状や種類など医務に相談し、調整など行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食事の準備や洗濯等なんらかの形で役割を持ってもらい日常生活の中で色々なお手伝いをお願いし頼まれごとに応じて貰う事で張り合いを感じていただけるようにしている。10時のお茶の時間には好みの飲み物を用意している。また家族から好きなおやつを持って来てもらい預かって部屋で食べてもらうようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	感染症が5類に変更後は認知症カフェや地域おこしされている古民家カフェに行ったりしている。気候の良い時期に府営の公園で家族に参加協力してもらい散策と音楽ボランティアさんによる歌を楽しんだ。外食したいとの要望があり岸和田サービスエリアまでドライブし食事をして来ている。	現在も認知症カフェ・オレンジカフェに珈琲を飲みに出かけるなど、密を避けての外出は継続している。桜の時期は玄関先で花見をして、10月末は車2台でドライブに出掛け秋の景色と岸和田サービスエリアで昼食(弁当)を楽しんでいる。日常的に天気を観て日光浴・外気浴を行い気分転換を行っている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族と相談しお小遣いを持ちその中からレクリエーションの参加費や外食の費用を払ってもらっている方がほとんどは小口の現金を職員が預かり小遣い帳を作り管理している。そのお金を持ち行事等で買い物をする事がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望のある方には、携帯電話を持ち込んでもらい自由に家族や友人に掛けている。子どもが同じ法人の障がい者施設に入居している方には毎週、手紙や電話のやり取り出来るように支援している。家族からの差し入れやプレゼントが届くと電話をかけてもらい、直接気持ちを伝えてもらっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	日常生活音、匂い、季節感を意識的に自然に取り入れるようにしている。緑や花々、その季節に合った物を置いたり、壁に掲示している。居間の窓は見晴らしが良く、自分が生活していた地域が見えベランダのプランターの手入れをしながら、会話されている。	リビングルームは窓から景色見晴らしが良い。エアコンで室温調整と換気を行い、空気清浄機を設置し感染対策し食前・食後にテーブルと手指のアルコール消毒を行っている。キッチンカウンターの金魚鉢にメダカとエビを飼っている。ベランダやエレベーターホールに置かれている観葉植物ポトス・サンスベリアの鉢に利用者が水やりをしている。廊下の壁にサンタの貼り絵・水仙の花・行事写真を掲示し季節感がある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テレビをじっくり観たい、会話を楽しみたいなど思い思いに過ごせるように席を配置し、皆さんの気配を感じながら一人でゆっくりできるソファを少し離れたところに置いている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居される際に自宅より使い慣れた物を持ち込むようにして貰っている。テレビやステレオなど個人の趣味が居室内で楽しめるようにシタンスや椅子など馴染みの家具を設置して居心地よく過ごせるようにしている。若い頃や家族との写真を飾ったり自分の部屋に戻ったという安心感を感じていただけるようにしている。	防災カーテン・エアコン・電動ベッド・クローゼット・ライティングデスク・テーブル・椅子の全てを事業所が設置しており、入居時に至便である。テレビや馴染みの小物・自分の作品・誕生日写真・家族写真などを飾り自分好みに配置して居心地よく過ごせる空間にしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	過度な見守りや付き添いは避け、事故に配慮しつつ、利用者自身が選択し移動出来るようにしている。苑内、各箇所に手すりを設置。自由にエレベーターを使用してもらっている。居室の中でも安全に動けるように、机やベッドの位置を考えその時の利用者の様子に合わせてレイアウトを変えている。		